

夢子は現在、四人の男性と付き合っている。

付き合っていると言っても夢子にとってはただセックスができればいいだけの相手だ。彼らの体に愛着はあれど気持ちは大してない。

したいときにしたくて相手を増やしていたらいつの間にか四人になってしまっていただけだった。

相手の男性たちは性格もバラバラで、夢子は彼らの性格を見つつそれぞれの好みの女性を演じることすら楽しんでた。

相手の喜ぶような仕草、言葉を与えて喜ばせる。そうして気持ちを昂らせたあとにするセックスがたまらない。

演じているとはいえそのときは自分も相手のことを本当に好きでいるような感覚を味わえるのだ。

夢子はこの遊びを我ながら最悪な遊びだと自覚していた。

いつかは辞めなきゃいけないだろう。こじれる前に。

今日は四人の中でも一番歳上の、千明(ちあき)と会う予定だ。

千明は三十代後半で、小さな会社ではあるが経営者だった。

「あ、千明さーん！」

「夢子ちゃん、お疲れ〜。この前話したレストラン予約してあるけど、それでよかった？」

「わあっ、ありがとうございます！楽しみです！」

明るくて、経験にお金を出したがる彼に受けるように、同じく明るくて多少世間知らずな女を演じる。

大袈裟に反応してみせれば千明も嬉しそうな顔をした。

千明の他の三人。

会社員でジム通いが好きな悟(さとる)。彼のためにとときどき一緒にジムに行くし、

固く真面目なフリーカメラマンの竜也(たつや)に対しては静かで小さな仕草を心掛け、

まだ大学生の啓太(けいた)にはお姉さんぶっていたりする。

悟は三十代半ば、竜也は二十代後半、啓太は二十歳だ。職業も年齢も違う彼らはそれぞれセックスの雰囲気も

行為も違う。

その違いを味わうのが楽しくて。

結局夢子はこんな状態をもう一年近く楽しんでいた。

千明は特に、夢子が自分ではなかなか行けそうにない「お高い」お店にも連れて行ってくれる。

最初はそういった料理の味を美味しいとは思えなかったが舌も成長するもので、最近ではすっかり分かるようになってしまった。

「どう？美味しかった？」

「美味しかったです！ご飯もですし、お酒も美味しかったな〜！」

お店を出て、手を繋いで歩く。

今日のホテルは千明が予約しているらしい。そこも高級ホテルのようだ。

賑わう夜の繁華街。

人の多さに紛れてときどきわざとらしく肩や腕を触れさせたりしてみる。

セックスがしたいだけの夢子にはホテルに向かうこの

時間すら前戯のようだものだ。

いつもそうして気分を高めることを楽しんでいる。

ホテルに着いてルームキーを受け取りエレベーターに乗った。

案内された部屋は最上階のようだった。

千明のことだからホテルの中でも一番高価な部屋を予約しているに違いない。

エレベーターを降りるとその階には部屋は一部屋しかなく、夢子の予想が当たっていることを物語っていた。

お金目的で千明と付き合っているわけではないが、この高揚感は今明のときでないと味わえない。

夢子はそれに感謝しつつも千明が開けてくれた扉から部屋へ入る。

もうひとつの扉も通って。

そして、飛び込んできた光景に夢子は体を凍らせた。

そこには、悟、竜也、啓太がいた。

後ろで千明が扉を閉めた。

誰も動かない。

けれど、全員の視線が自分に集中していることは分かる。

きっと自分が何か言わないといけないのに、開いた口からは何も出てこなかった。

この光景だけで何が起こったかは理解できたのに。

固まる夢子の肩を、千明が抱いた。

「俺、夢子ちゃんとのこと真剣に考えてたんだよね。だから調べさせてもらっちゃった♡」

「……、」

顔を横に向ける。

千明は笑っていた。

「そしたら俺の他に三人も出てくるんだもんな〜」

体の血の気が引いていく。

千明の明るい口調が逆に怖い。

「とりあえず男四人で一回会って色々話したから、全部分かってるからね。それとも調査期間に会わなかっただ

けでまだ他にいる？」

「……ご、ごめ、」

「他にいるかって聞いているんだけど」

「いない、いないです」

高級ホテルらしい、贅沢すぎるほど広い部屋。

バルコニーには二人で入るには大きすぎるジャグジーがあって、そこへ続く大きな透明なガラスに夢子たちが反射している。

身を縮こまらせ千明に肩を抱かれている自分。それがなんとも滑稽で。

夢子は自分の情けなさに目に涙を滲ませた。

完全に自分が悪い。

それでも自分がこれからどうなってしまうのか怖い。

思考は一気に飛躍し、最悪を想像して手足が震え出す。

「悲しいことに、俺たちみーんな夢子ちゃんのこと普通に好きだったからさあ」

「…っ、ごめんなさい、ごめんなさい、」

「だから今日はみんなであそぼっか」

「え、…ツ」

抱かれた肩を力任せに引き寄せられたかと思えば、何か黒い布で視界が塞がれた。

「な、なに、やめて、」

それから足音が近付いてきて恐らくその人に両手を掴まれて。

冷たいもので両手を拘束された。

「や、やだ…！！ごめんなさい、謝るから！なんでもするから！」

「おもちゃの手錠だから安心して。自分では取れないけどね」

聞こえてきたのは竜也の声だ。

拘束された手を引っ張られたら、確かにプラスチックのような音が鳴る。

夢子はそのまま歩かされるように竜也に腕を引かれ、千明に体を押された。

視界を塞がれ恐怖に包まれた状態でまともに歩けない、それでもベッドのほうへ無理やり移動させられて。

ベッドへ寝かされた。

「……、ごめんなさい、ほんとに、許して」

目を覆う布に涙が滲んでいく。

夢子がうわ言のように「ごめんなさい、ごめんなさい」と呟いていると夢子のすぐ周りのシーツが沈んだのが分かった。

囲まれている。

それから誰かが夢子の腰の辺りに跨るように乗った。

「これ、俺が買ってあげた服だよね。毎回プレゼントした服着てきてくれて嬉しかったな～♡」

千明だ。

千明に服を掴まれたかと思えば。

ジャキ、

ジャキ、

と金属が布を裂く音がして。

夢子はずいに言葉すら紡げなくなり泣きじゃくってしまった。

ハサミの音だ。

彼は刃物を持っているのだ。



「あ、ブラも俺が買ってあげたやつじゃん♡」

ハサミの先が夢子の皮膚に当たって、

ジャキ、ジャキ、

音を立ててそのブラも切られた。

はらりと布が体から落ちる感覚がした。

夢子はいま胸をはだけさせられているのだろう。

「…ふ、うう、……ぐす」

視界を奪われ腕を拘束され、服まで切られてしまった。

更に体の上に千明が跨っていてハサミまで持っている。

体はずっと震えたままだし今度は歯までカチカチと音を立て始めた。

そこで、誰かが夢子の頬を包んだ。

そのまま喉をそらすように上を向かされるから首に何かされるんじゃないかと抵抗してみたけれど、そうではなかった。

れるっ、

突然唇を舐められ、

ぢゅ、ぶぢゅっ、

ぢゅっ、ちゅうっ、ちゅぶっ

唇を覆うように重ねられ吸われた。

ぢゅ、ぢゅっ、ぢゅる

れるれる、れるっれるっ、ぢゅぶぶっ

「四人の男をとっかえひっかえしちゃう淫乱夢子ちゃん、いまキスしてるの誰か分かるかな〜？」

おどけたような千明の声。

夢子は訳も分からずされるがままになっていて答えられない。

口内で舌を舐め回されときどき唇を吸われ。

状況に思考が追いつけなくてこれが誰なのか考える余裕なんてない。

「答えろって」

ぴしゃりと千明の冷たい声がして、夢子は咄嗟に答えた。

「さ、さとり、」

「えー？違うんだけど…悲し」

夢子の答えにすぐ隣で声がした。

悟は夢子の横側にいたらしい。

その悟は、

「お仕置きが必要だよね♡」

べろ…っ♡

晒されていた夢子の乳首を舐め上げた。

「あ…ッ、？」

急に与えられた刺激に混乱する。

千明の体重が乗った体がぴくりと跳ねた。

べろっ♡

れる♡れる♡れるれる♡

れるお…♡

「こんな状況でも感じちゃう？乳首すぐ大きくなっちゃった♡」

悟はそう言ってまたすぐ乳首に舌を這わせた。

れ…♡れるお♡

乳首の周りを這い、

れる♡れる♡れる♡

乳首を舐め回し、

べろっ♡べろべろべろっ♡

先端を舌で叩くように弾く♡

「んあ、あッ、」

夢子が反応を見せると今度は誰かが反対の胸を掬い、

ちゅっ♡

ちゅぽ♡…ちゅ、ぽ♡

ちゅぽっ♡

まだ膨らんでもいない粒を啄むように吸った♡

「…ッ、あ、っ」

怖い、はずなのに♡

痛みじゃない、快感を与えられてしまえば体が勝手に  
反応してしまう♡

「誰がキスして誰がいま乳首にキスしてるか当ててみる  
って」

千明の声が降ってくる。

そう言われてもキスされ両乳首を弄ばれ、同時に三人  
に触られていては何をどう考えていいのか分からなかった。

「……、わ、わかんない」

「わんないじゃねーだろ、今までさんざんセックスしと  
いてさあ」

「ごめんなさい…！——あ…うっ♡」

ぢゅううッッ♡♡♡

両乳首が吸われて背中が浮く♡

千明の冷たい声と乳首へ与えられる快感が交互に責め  
てきておかしくなりそうだった♡

ちゅぶ、ちゅ♡ちゅっ♡ちゅる、れるっ♡

その間も唇は吸いつかれ♡

ぢゅうううッッ♡♡♡

ぢゅっ、ぢゅううッッ♡♡♡

乳首はきつく吸い上げられる♡♡

「は…ッ、あ、あ♡あ、う♡♡」

みんなに謝らなければならないはずなのに♡

今まで何度もセックスして夢子の気持ちいいところを知っている四人に責められれば気持ちよくなってしまう♡

「ほらあ、キスしてんの誰？」

「…け、けい、た？」

「乳首は？」

「たつ、や」

「あ～あ、逆だよ♡キスしてんのは竜也くんで乳首しゃぶってんのが啓太くん」

よく考えもせず答えてしまって、見事に外れたらしい。

すると体から千明の重さが消えた。

彼の体は足元へ移動し、すぐに夢子の下着に手を掛けた♡

「増えるぞ♡」

ずるりと下着を下げ、まだ触られてもいなかったクリトリスを、

ずぞっ♡♡♡

ずぞぞぞぞ……ッ♡♡♡

思いっきり窄めた唇で吸い上げる♡♡♡

「あ…ッ！♡♡♡あ、あっ♡あ、…ッ！♡♡」

衝撃に暴れる足は千明に押さえこまれその刺激を逃す  
ことができない♡

唇も乳首もクリトリスも捕らえられてしまった夢子は  
腰をくねらせるだけだ♡♡

ずぞぞっ♡♡♡

「ひ、…ッ”♡♡あ、ッ♡♡あ♡♡や、あっ♡♡♡」

ずぞぞッ♡♡♡ずぞぞぞぞ…ッ♡♡♡

「……ッ♡♡～～～ッ”♡♡♡」

ヒリヒリと鋭い快感を与えられるクリトリス、その快  
感が吸われる乳首で増幅して、声はキスする唇に飲み込  
まれる♡♡♡

「すげー気持ちよさそうじゃん、四人にされるなんてま  
ともに付き合ってたらないもん♡」

れるっ♡♡れるれる♡♡れる♡♡ちゅ♡♡ちゅ♡♡れる  
るれるっ♡♡

口を開かされ唇も舌も舐め回されキスされて、  
ぢゅっ♡♡♡ぢゅッ♡ぢゅっ♡ぢゅ…ッ♡♡♡  
ぢゅうううっ♡♡♡ぢゅううッ♡♡♡  
乳首は吸われ、伸ばすように吸い上げられ、  
ずぞぞぞぞ…ッ♡♡♡ずぞぞぞっ♡♡ずぞぞ  
ぞぞぞ…ッ♡♡♡

クリトリスは皮ごと唇で締められ音を立てて震わせら  
れる♡♡♡

「…う♡♡あっ、あ♡♡あッ♡♡……う、ん♡♡  
♡」

体を振っても四人は手を緩めることはない♡♡  
夢子は腰を浮かせクリトリスを突き出すような格好で  
小刻みに震えた♡♡

「イきそうなんだろ♡」  
「夢子、ピンって体突っ張るから分かりやすいよな♡」  
「腰浮かせて千明さんの口にクリ押し付けちゃって…」  
「イっちゃえ、全部気持ちよくされてイっちゃえ」

あらゆる方向から知った声がそう責めたてる♡♡



夢子の絶頂を予感した四人はそのまま夢子を追い詰めた♡♡

れる♡♡ちゅ♡ちゅっ♡ちゅぶっ♡ちゅぶぶっ♡♡♡  
ちゅッッ♡♡♡ちゅッッ♡♡♡ちゅッッ♡♡♡ちゅッ  
ッ♡♡♡

ちゅうッッ♡♡♡ちゅうッッ♡♡♡ちゅうッッ♡♡♡  
ちゅうッッ♡♡♡

ずぞぞぞぞぞッッッ♡♡♡ずぞぞぞぞぞぞッッッ♡  
♡♡

一定のリズムで乳首もクリトリスも吸われて♡♡

「……ッ” う♡♡♡うう、っ♡♡♡……ッ” ヅ” ♡♡  
♡だ、だめ、…ッ” ♡♡♡……う、あッ♡♡♡あ”  
……ッ” あああっ！！♡♡♡♡♡」

突き出した腰が頂点で何度か痙攣し、シーツに落ちた♡♡

絶頂にびく、びく、と震える体♡  
男たちはまだ離れない♡♡

ちゅぶぶぶっ♡♡♡ぢゅぶ、ぢゅぶぶぶっ♡♡♡

息もできないほど唇を巻き込み舌を吸われ♡♡

ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡ぢゅッ♡♡♡

きつく締め上げられた乳首が唇で挟まれ吸い上げられ♡♡

ずぞぞぞぞ……！♡♡♡べろべろべろべろべろべろべろべろべろ♡♡♡

クリトリスは吸い上げ伸ばされたまま口内で舌で叩かれる♡♡♡

その上、

ぐ、ちゅ♡♡♡

千明の指が挿入されて♡♡

「……ッ、…！♡♡♡」

驚いた夢子の目が布の下で見開いてすぐ♡♡

ぢゅぼっ♡♡♡ぢゅぼっ♡♡♡ぢゅぼっ♡♡♡ぢゅぼっ♡♡♡ぢゅぼっ♡♡♡ぢゅぼっ♡♡♡

その二本の指は夢子のおまんこを入り口から奥へ、膣壁を引きずりながら抽挿を始めた♡♡

いったばかりなのに無理やり快感へ引きずりこまれる  
♡♡♡

「…………ッ” ッ” ！♡♡♡ん” っ、う、ぶッ♡♡♡や、  
やめっ、…………ッ” ！！♡♡♡」

処理しきれない快感に逃げようと暴れる体は四人がかりで押さえ込まれ、腕を拘束するおもちゃの手錠はカチャカチャと乾いた音を立てた♡♡

ぢゅぼッ♡♡♡ぢゅぼッ♡♡♡ぢゅぼッ♡♡♡ぢゅぼッ♡♡♡ぢゅぼッ♡♡♡ぢゅぼッ♡♡♡

指の付け根が入り口へ勢いよく当たる♡♡  
その振動にすら感じてしまう♡♡♡

「ん” ああッ♡♡♡あ” …ッ♡♡♡あ、ッあ♡♡♡や、だあっ♡♡ち、ちあき…ッ！やめ、」

「誰に気持ちよくされてんのか自覚しろ♡♡もっかいいけ♡♡♡」

ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼッッ！  
♡♡♡

激しく摩擦する指♡♡

それに釣られるように、

ぢゅぞぞぞぞ！！♡♡♡ぢゅぞぞぞぞぞ…！！♡♡♡

クリトリスを吸う力も強くなって♡♡

ぢゅッぽ！♡♡ぢゅッぽ！♡♡ぢゅッぽ！♡♡ぢゅッ  
ぽ！♡♡ぢゅッぽ！♡♡

ぢゅっ♡♡れるれるれるれる♡♡♡れるっ♡♡ぢ  
ゅぶっ♡♡ぶっ♡♡♡

めちゃくちゃに乳首も唇も吸われる♡♡♡

「あゝ…ッ”ッ”♡♡♡あ、は…っ♡♡♡だめっ♡♡♡  
だめっ、またイクっ♡♡♡」

ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼッッ！  
♡♡♡

ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼッッ！  
♡♡♡

千明は力任せにピストンした♡♡

擦られる膣壁、おまんこごと揺らす振動に、夢子はた  
まらなくなってまた腰を浮かせてしまう♡♡♡

「いゝ、く……！！♡♡♡いくッ、ん…ッ”、……………  
〜〜〜〜〜ッ”ッ”ッ”！！♡♡♡♡♡」

ずぼ…っ♡♡♡

指が音を立てて出て行って、体も解放された♡

夢子は体をシーツへ落とし深く呼吸をして息を整える。

目隠しをされ手首を拘束されたときには最悪を想定して怖かったのに。

されたことは四人に気持ちいいところを同時に責められ連続でイカされることだ。

夢子は彼らがどうしてこんなことをするのか分からない。

でも許してくれるまで謝り続けるしかないだろう。

気持ちよくなっている場合ではない。多分。

——夢子の周りのシーツが何度か沈んだ♡

彼らが入れ替わっているようだ♡

そして誰かに足を掴まれ、開かされ♡♡

右足に誰かの体重がかかったかと思えば♡

べろお…♡

「ん…♡♡♡」

クリトリスをねっとりと舐められ夢子の足が揺れた♡

♡

けれどそれだけではなかった♡

同じように左足にも体重がかかり、

れるっ♡

「あ…ッ！？」

クリトリスに舌の感触が増えた♡

べろっ♡♡べろっ♡♡れるっ、れるれる♡♡

べるべるべるべるっ♡♡♡れるれるれる、れるれる

…♡♡♡

舌が二枚、夢子のクリトリスを挟んで舐め回している

♡♡♡

「う、うそ…ッ、あ、あッ♡♡♡」

べろっ♡♡べろ、べろ♡♡

小さなクリトリスが二枚の舌で押し潰されるように♡  
れるれるれるっ♡♡♡れるれるれる♡♡♡

挟まれて形を変えて擦られて♡

べるべるっ♡♡べるっ♡♡れるお♡♡♡れるれるっ

♡♡♡

その初めての感触に足が勝手に開いていく♡♡♡

「あッ♡♡あ、あっ♡♡…ッ、あ♡♡は、…あ”っ♡♡  
♡」

二人がかりで押さえ込まれた足♡

その中心のイったばかりで敏感になったクリトリスが  
焼けるように熱い♡♡

小さな粒が膨らんでいくのが自分でもわかるくらいだ  
♡♡

その下のおまんこまでがヒクヒク♡と蠢いてしまう♡  
♡♡

べるべるべるっ♡♡♡れるれるっれるっ、れる…ッ  
♡♡♡

「あ♡♡あ、ッ♡♡♡ん、あ♡♡♡アっ♡♡」

れるっ、れるっれるっれるっ♡♡♡べるおッ、べるっ、

べるっ♡♡♡

「…う、う♡♡ん” ツ♡♡♡あ♡♡ああッ” ♡♡♡」

それぞれが違う圧でクリトリスを刺激する♡♡

夢子の足はもう押さえ込まれなくても勝手にぱかっ♡

♡と開いていた♡♡♡

腰は快感に波打つように揺れる♡♡

揃えられた手をぎゅっと握り締め、夢子は夢中になってしまっている♡♡♡

そこへ、今度は別の二人が夢子の胸に触れた♡♡

大きな手が胸を包み、もう片方は乳輪ごと柔く挟み♡

べるっ♡♡♡

べるるるるるるるッッッ♡♡♡

こちらもそれぞれの乳首を舌で刺激され始めた♡♡♡

「んアあ…アッッ！♡♡♡」

べるるるるるるるッッッ♡♡♡

べるるるるるるるッッッ♡♡♡

包まれた手の中で勃起したままの乳首が縦横無尽に舐め倒され♡♡

もう片方は勃起を強調するように挟まれたまま厚い舌



を叩きつけられる♡♡♡

「……ああアッ♡♡♡あ…ッ！♡♡は、ッあ♡♡♡ん”  
…ッあ♡♡♡あああッ♡♡♡」

どの舌が誰のものなのかも分からない♡  
それでもそれぞれの的確に夢子を悦ばせ、またイかせ  
ようとしている♡♡

れるっ♡♡れるっれるっ、べろっべろっ♡♡♡  
べるっべるっべる…ッッ♡♡♡れるれるれるれる♡♡  
♡

べるるるるるるるッッッ♡♡♡

べるるるるるるるッッッ♡♡♡

「う”、ん……ッッッ！！♡♡ん” あ” …、あ、は♡♡  
♡♡」

みっともなく開いてしまった足を、筋が浮くほど力ま  
せてしまう♡♡

お腹に力が入って♡握り締めた拳もカタカタと震え出  
して♡

「や、あ”っ♡♡♡いく……ッ♡♡♡いくっ、」

べるるるるるるるッッッ！！♡♡♡

べるるるるるるるッッッ！！♡♡♡

小さな性感帯の粒たちが舌で叩かれる♡♡

強く痺れるような刺激が夢子の体へ蓄積されて♡♡

「……………あ、いくっッ！♡♡♡い”、く……………ッッッッ  
！！！！♡♡♡♡♡♡」

弾けるように体が跳ねた♡♡

繰り返す絶頂にお腹の奥がぎゅー…と縮こまるのを感じ  
る♡♡

夢子は何度か体をビクつかせると、

「ッッ、はあ、はあ…♡♡♡」

胸を激しく上下させ懸命に息を吸った♡

連続でイカされて体が悲鳴を上げているようだった♡

指先がうっすらと痺れて心臓も音が伝わってくるほど  
激しく音を立てている♡

けれど終わらなかった♡

シーツが沈んでまた誰かが場所を変えたことは分かったが、いきなり手錠ごと腕を掴まれ体をひっくり返された♡♡

腕は頭上でまとめられ頬と上半身をシーツに押さえつけられる♡

それが苦しくて、  
「う、あ、ちょっと待っ、」  
声を上げたものの、

ずちゅッ♡♡♡♡♡

大きな手で腰を掴まれ上げさせられて♡

お尻に誰かの腰が当たって♡大きなちんぽが勢いよく  
押し込まれた♡♡♡

「うッ、ううう……ッ♡♡♡」

指とは圧倒的に違う体積がおまんこを一気に押し広げて奥へ到達する♡♡

誰なのかは分からないけれど今まで誰にもこんな乱暴な挿入をされたことなどなかった♡

背中がゾクゾクとくすぐったくて夢子は今度は額をシーツに押し付ける♡♡♡

ちんぽの大きさにおまんこがすぐに慣れてくれない、のに♡♡♡

…パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡

腰はすぐに動き出してしまった♡♡

「う、あッ♡♡あ…ッ！♡あッ、あ♡あ”っ♡♡」

おまんこの奥を思いっきり突かれて押し出される声♡  
今まで触られていなかったところにちんぽを押し込まれじわり♡と気持ちいい感覚が広がってってしまう♡

「夢子さん、誰のちんぽか分かりますか？」

すぐ近くで啓太の声がした♡

その手がシーツに押し付けられている夢子の頭を撫でている♡

「……ッ、わ、わか、ん、な…あ♡」

夢子が揺らされながらそう答えると♡

パンッ！！♡♡♡パンッ！！♡♡♡パンッ！！♡♡♡  
パンッ！！♡♡♡パンッ！！♡♡♡

「ん”あッ♡♡あ”♡♡♡…はっ、あ”♡♡あ、アッ”

♡♡」

腰を更にぶつけられ♡♡♡

「分かんないとか言うから怒ってますよ？」

「…ッ」♡♡う♡♡ち、ちあき、？」

快感に霞んでいく思考でそう答えると♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！

！♡♡♡♡

「あゝっ、あゝ あ〜〜〜ッ、〜〜ッッッ！！♡♡♡♡」

責められるようにピストンが小刻みになった♡♡

「残念♡俺じゃないよ♡♡」

千明の声がして、恐らく千明の手が夢子の腰に置かれた♡

ぐっ、と上から押さえこむように力を込められ何をされるのかと思えば♡

「お仕置き♡♡」

うつ伏せの体勢のせいでほんの少し皮から露出していたクリトリスを、

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！！！

♡♡♡♡

勢いよく爪で弾く♡♡♡

「ふう ううううッッ !!!♡♡♡♡♡」

強い刺激に腰が激しく揺れた♡

それもピストンしている誰かの両手と千明の手で押さえ込まれている♡♡♡

夢子は足だけをバタバタと跳ねさせながら呻いた♡♡♡  
♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

「う あッ♡♡♡あ …ッ」♡♡や、ア っ♡♡♡  
♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

「あ ヅ あ…！♡♡♡あ ア ヅ ヅ ！♡♡♡♡♡  
〜〜〜〜ッ ヅ ！！♡♡♡♡」

「もう二択だぞ♡♡」

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！♡♡♡



片手で夢子の腰を押さえつけつつ、クリトリスを乱暴に弾く千明が笑う♡

「くッ、あゝ♡♡♡あ…ッ♡♡うううゝッ♡♡♡」

「気持ちよくてそれどころじゃないか？♡♡♡」  
カリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！♡♡♡



「だ、めッ、やめ…ッ♡♡♡クリ、だめっ、イっちゃう、からあッ♡♡♡♡」

「…あは、まんこすっごい締まる♡♡」

背後から声が聞こえて、夢子は反射的に名前を口にした♡

「さ、さとり、……ッゝん、あゝ♡♡♡さとり…！」

「正解♡♡♡ご褒美だよ♡♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

「んあゝッあああ…ッ♡♡♡…はッゝあゝ♡♡♡あ…ッゝ！♡♡あ、んゝ…ッゝッゝ！♡♡♡」

しっかりと腰を固定され最奥を完勃起ちんぽで高速で突かれる♡♡

そこから熱い快感が伏せた頭のとっぺんからバタバタと跳ねる足先へ広がって行って♡♡

「お仕置きとご褒美、同時にもらえて良かったなあ♡♡♡」

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

弾かれるクリトリスで膨れ上がった♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

「…アッ、あッ♡♡♡あゝっ、んんッ！♡♡♡も、ムリ…いゝ♡♡♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

「う、あゝッ♡♡♡あっ♡♡♡あゝ♡♡♡あっ♡♡♡ッ



“♡♡♡あ、だめ…ッ”！♡♡♡あっ、あああッ♡♡♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！  
！♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッッッ！！  
♡♡♡♡

「イクッ♡♡♡い、く、……！！♡♡ア、アアアッ  
ッ”……！！！！♡♡♡♡♡」

背中を丸めて全身を震わせ、夢子は絶頂を迎えた♡♡

固定されても尚ビクつく腰♡♡

それに悟はパンッ♡パンッ♡と音を鳴らして腰を当てる♡♡

中でちんぽがビクビクと精を吐き、ずるりと抜けていった♡♡♡

夢子の体がシーツに沈む前に、バックの体勢のまま違う誰かの手がまたその腰を掴んだ♡♡

位置を調整するように腰を上げると♡

とちゅっ♡♡♡

「……うッ、」

イってすぐのやわくなったおまんこにちんぽが押し込まれる♡♡

休む暇もない♡♡♡

こじ開けられてしまった♡♡

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

軽いピストン♡

それでも絶頂後の脱力した体はまたシーツに押し付けられるし、夢子のおまんこは過敏にそのちんぽに感じてしまう♡♡♡

しかもそこへ誰かの指が乳首を捕えて♡♡♡

ぴんっ♡♡

ぴんぴんぴんぴんぴんぴんっっ♡♡♡♡♡

四つん這いになり重力で引っ張られるその薄い皮膚を弾くから♡♡

「は…ッう” ……！！♡♡♡♡♡」

体をビリビリと電流のような快感が走っていった♡♡



「あは、涎垂れちゃって♡」

すぐ目の前で悟の声♡そのまま濡れた唇を塞がれた♡  
♡

唇を舐められ吸われて、閉じられない唇の端の唾液まで舐め取られる♡♡

「…ん♡♡う♡♡♡んあ…ア♡♡」

甘やかすようなキスに頭がとろけていく♡

夢子はいつの間にか自ら舌を差し出していた♡

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡ とちゅっ♡  
♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

規則的なピストン♡

そのピストンを受けながらキスされ自ら舌を出しねだる夢子♡

それを見た挿入している男は、

とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡

とピストンに力を込めた♡♡

「誰か分かった？」

キスの合間に悟にそう言われても、快感で霞がる頭ではよく考えられない♡

「…っ♡♡あ♡♡♡ん…♡♡ん”っ♡♡♡ん♡♡♡」

考えようとしてはちんぽとキスに意識を持っていかれ

る♡♡

とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅ  
っ！♡♡とちゅっ！♡♡

とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅっ！♡♡とちゅ  
っ！♡♡とちゅっ！♡♡

「ほら、答えてあげなきゃ♡」

「…も、わ、わかん♡ない…♡♡」

夢子が泣き声のような声でそう言うと♡♡

「…誰にされても一緒なんだ、夢子さんは。むかつく」

寂しそうな啓太の声が聞こえて♡♡

急に右足に腕を引っ掛けられそのまま持ち上げられて  
しまった♡♡

まるで結合部を晒すように大きく足を開かされ、啓太  
は更に体を重ねそのままピストンを続けている♡

すると誰かが動いた♡

開かされた足の間、ピストンに揺れるクリトリスに誰  
かがしゃぶりついた♡♡

ぢゅるっ♡♡♡

ぢゅるるるッッッ♡♡♡♡♡

「んああああ…ッッ！！♡♡♡♡♡♡」

どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！  
♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡

一突きずつ重くなるピストン♡♡押し込まれるちんぽ  
に体ごと揺らされながら♡♡♡

ぢゅるるるるッッッ♡♡♡ぢゅぽっ♡♡ぢゅぽっ♡♡  
ぢゅッッぽ！♡♡♡

ぱかっ♡と開いた足の中心、赤く腫れたままのクリト  
リスをフェラチオするように吸われる♡♡♡

「あゝ♡♡♡アアアゝッゝ♡♡アハッ、あゝッゝ♡♡  
♡あ…ッゝ♡♡♡」

ちんぽに突かれながらクリトリスまでしゃぶられるな  
んて、初めての体験だった♡♡

セックスが好きで男をとっかえひっかえしてきても味  
わえなかった感覚♡

不安定な大勢の夢子だったが支えられなくても既に自  
ら男の唇をクリトリスへ誘うように足を開いてしまっ  
ている♡♡♡

ぢゅるるッ♡♡♡ぢゅぽ♡♡♡ぢゅぽッ♡♡♡ぢゅ  
うッぽ♡♡♡ぢゅっぽぢゅっぽぢゅっぽッ！♡  
♡♡

誘われるがままにその突起を吸ってくれる唇♡♡

夢子は震え上がった♡♡♡

「な、なに、これえ…♡♡♡あッ♡♡♡アアッ♡♡あ  
ッ♡♡♡すごい、きもち……ッ！♡♡♡」

どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！  
♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡どちゅっ！！♡♡♡

ぢゅるっ♡♡♡ぢゅっ♡♡♡ぢゅっぽ♡♡♡ぢゅ  
うッぽ♡♡♡ぢゅ……ッ、ぽっ！♡♡♡

「や……、ばっ♡♡♡♡♡これ♡♡♡いいっ、いくっ！  
♡♡♡♡♡イっちゃう、」

そう宣言した夢子の体が引き攣ると、空いていた両乳  
首にまで手が伸びてきて♡♡♡

こりりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡  
勃起した乳首をピンポイントに挟まれ左右にこねくり  
回し♡♡♡

ぎゅううううッ♡♡♡ぐりぐりぐりぐりぐり

……♡♡♡

乳輪ごと挟まれ搾るように伸ばされた♡♡♡

「ひ……ッッ、うううう” う” ャッ♡♡♡♡♡だ、め、  
………イ、ッ、く……♡♡♡♡♡」

「あ～……、くそ、」

全てを責められて絶頂寸前のしなる夢子の体に、啓太  
は呻いた♡

そしてピストンは乱暴なものになっていく♡♡

ドチュッッ！！♡♡♡ドチュッッ！！♡♡♡ドチュッ  
ッ！！♡♡♡ドチュッッ！！♡♡♡ドチュッッ！！♡♡  
♡

若く硬いちんぽを、普段の彼からは想像もできない圧  
で押し込み♡♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりこり♡♡♡

ぎゅうううッッ♡♡♡ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり  
ぐり……♡♡♡

乳首は両方しっかりと挟み込まれこねくり回され♡♡  
♡

ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！  
♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡

クリトリスは根元から搾り上げられ♡♡♡

■続きは製品版にて♡